| CRT 栃木放送『開倫塾の時間』 | 2022 年 9 月 3 日(土)放送内容資料 |
|---|---|

2022 年 8 月 29 日(月)17:30 ～ CRT スタジオで収録

# 大内兵衛、茅誠司他著「私の読書法」岩波新書1960年10月20日刊を読む

開倫塾
塾長　林明夫

## 1 「主観主義的読書法」　清水幾太郎著

『読書法』の 2 つの問題

1．(1)どういう本を、どこで、いつ、いかに読むか
　(2)どんな本にしろ①読んだ本の内容を、いかに保存するか
　　②どうして後日の役に立たせるか
　　③そのために、どんな工夫をするか
　(3)①ノートに書きまとめておく
　　②ルーズリーフを用いる
　　③カードを用いる
　　} いろいろあるが、長続きしない

2．〈書物兼ノートブック〉のすすめⅠ
　(1)書物(本)をノート兼用にしてしまう
　(2)新聞の見出しのようなものを、ドンドン余白に書き込む
　(3)そのページで取りあつかわれている問題に関する自分の感想

3．〈書物兼ノートブック〉のすすめⅡ
　(1)同じ問題に関連ある他のページ
　(2)他の本の表題やページ
　(3)自分が書こうとしている論文の荒筋

○どんな本でも買い込んで自分の所有にすること

P1 ～ 9

## 2 「一月・一万ページ」　杉浦明平著

(1)わたしは、毎月 1 万ページ以上を読む義務を自分に課することにした
(2)わたしは、だいたい 4 冊くらいの本をかわるがわる読むくせをもっている
(3)その 4 冊のうち 2 冊は自由に選択していいが、他の 2 冊はあらかじめ定められた順序に従わねばならないことを自分に命じた
　＊自由選択の 2 冊のうち 1 冊は、翻訳であり、他の 1 冊は、日本文学でなくてはならぬ
　＊残りの義務づけられた 2 冊についていえば、その内容はさまざまでなくてはならないことになっている

P11 ～ 15

## 3 「読書のたのしみ」　加藤周一著

岩波文庫によって文学や思想のおもしろさを覚えた

4 「乱読から批判的読み方へ」　蔵原惟人著

1．（1）ほんとうに自分の教養と知識向上のために、本が読めるような条件をつくってゆくこと
（2）与えられた条件のなかで、ひとりひとりが、そのために工夫することが、どうしても必要
（3）気に入った何冊かの本は 3 回、4 回と読みかえしてそれが自分の教養の土台になっている

2．（1）読んだ本を忘れないためには、ノートを取ることは１つのよい方法
（2）重要なものや面倒なものを読むときには、ノートを取るように努力し、必要に応じてそれを読みかえす
（3）ノートは読みかえさなければ意味はない

3．（1）自分の専門の仕事以外のことも知っておくことは、その専門のためにも有益である
（2）読んだことを整理して系統だてておくように努力すれば、そして、それをくりかえしてやれば、ある程度、記憶を固定化することができる
（3）こういうわけで、私は、読む本の数を求めない。よい本をなるべくていねいに読むようにしている

4．（1）書いてあることに自分の考えを対置しながら読む
（2）書物を批判的に読みながらそこから学んでいく
（3）①本で読んだことを何でも信用する。特に、特定の著者の書いたものはそのまま信じてしまう
②反対に、その中に間違ったことが書いてあると全部否定してしまう
③自分の主観によって著者の意見をゆがめて見てしまったり、自分に近い著者の間違った見解に引きずられたりする
＊このようなことのないように!!

P31 ～ 40

5 「枕下に書を置いて眠る」　茅誠司著

（1）中学生の頃の読書欲の旺盛であったことは、今から考えても驚くべきものがあった
（2）小説に熱中した。私の一番よく読んだのは徳冨蘆花のもので「思出の記」とか「みみずのたはこと」今でもその場面々々を記憶している位である
（3）又、誰でもがそうであるように、夏目漱石のものは余すところなく読んだ
（4）しかし、何と言っても大学生から卒業にかけての頃の専門書位身を入れて読んだものはあるまい
（5）最近は、俗事に多忙なまま書物に集中することができないことは何とも残念であるが、それでも時折、丸善の 3 階で最近発行の専門書を手に入れた時は嬉しくて嬉しくて枕下に置いて眠る、そして僅かな暇にその中に入り込んで時折の夢を楽しむという悲しい身分に下落してしまった

P41 ～ 46

6 「このごろの読書」　大内兵衛著

1．(1)いまさら漱石もおかしいが、読んでみるとさすがだなと思うことが多い
(2)シェイクスピアを映画を見ようとするとき読みかえす
(3)このごろは創元社の「少年少女文学全集」や岩波の「少年文庫」を孫共から取りあげてそれを読む。これがちょうど気分に合う

2．(1)書物は図書館で読んでいい
(2)図書館で読む方が力が入る
(3)本を読むときは、必ずルーズリーフ式のノートブックを持て
①新しい本を手にするとき、何よりもさきに、そのノートに本のタイトルと著者、発行年度などを書いて見出しカードとせよ
②それには図書館の番号も付記せよ
③次に本の性質により目次だけとか、読んだ本の必要な部分とか、そのレジュメとかを書きとめよ

3．(1)そして最後に短くともよい、読後の感想を書いておけ
(2)こういうことには時間がかかり無駄だと思うかもしれぬがそうではない
(3)これを必ず一生つづけよ、いやしくも研究者となろうと思う人はこれを一生つづけよ、その収穫は後々ある

P47 ～ 56

7 「ノートを取る場合と配合を求める時」　田中美知太郎著

仕事の上の読書ではノートを取ることが多い

1．(1)仕事の上の必要でいろいろ書物を読む中で読み放しにできないような気持になることがある
(2)そういう場合、もう一度読み直して、その重要だと思われる点をノートすること
(3)外国の書物は、原語のまま要領を書き抜いて、そのつなぎを日本語で書いておく。時には翻訳もしておく

2．うまくノートができた場合には
(1)著者の思想がかれ自身の言葉で、うまく急所だけを捉えられることになる
(2)そのノートの後に、若干の批評を加える
(3)こうしておくと、後で適当の時に使えるし、一応わたしなりに卒業したような気持にもなるので、一種の安心感もできてくる

3．(1)忙しい仕事の合間にかえって貴重な暇が見つかるように、一種類の読書(勉強)に没頭している間に、かえって別の種類の書物がよく読めるようになるものなのである
(2)これも恐らくバランスが必要なのであってやりそこなえば両方とも駄目になるかも知れない
(3)とにかく 1 つのことについては、すっかり腰を据えてどこまでもやるつもりが、一方にちゃんとなければいけないのだろう

4．(1)その点がしっかりしさえすれば、こんな風に違った方面の読書をうまく配合するというのもかえって効果的で専門の仕事にも思わぬところで役立つ
(2)今でもわたしはそんな風にして違った方面の読書をまぜることにしている
(3)変化はひとつの休息

P89 ～ 95

8 「読書遍歴は独り旅で」　都留重人著

1．(1)父は自分が本を読まないことはもとより、家庭の中に書物があることを「ちん入」という表現を使いきらっていた

(2)新聞だけは手にしたが、読むところは「社説」欄だけである。これを彼は 15 分くらいかけ丹念に読み、読んだあと、しばらく考えている

(3)父の理くつはこうである。社説というのは、どの新聞社でも一番苦心するはずの欄である。まず何を主題にするかということで、新聞社の最高頭脳が協議する。主題が決まったら次にどんな主張を打ち出すかについてああでもない、こうでもないと議論をたたかわす。その上で誰かが書き上げたものを、表現をみがくため推敲する。だから社説だけ読んでおけば、世の中の大切な動きは、いちばん手っとり早くわかる、というのだ

2．(1)中学生のころ、私はこの話を聞いて、父はいつもの「あまのじゃく」だなと思っていたが、だんだん年をとってみるとやはり一つの見解だったと気付いてきた

(2)今でもおぼえているが、大正 13 年に漱石全集の予約刊行が発表されたとき母は一生のねがいと言わぬばかりの真剣さで父に購入のゆるしを求めた。母の熱意にはついに父も敗けたらしく、私が翌年病院から出てきたときは客間にあの大型の漱石全集が何冊か並んでいた

3．(1)アメリカの大学にいたおかげで、本は図書館で読み、必要とあればノートを取るという「習慣」が身に着き、本に書き入れをしたり、線を引いたりする技術の工夫は、ついぞしないまま、今日にいたっている

(2)何年もたってから読みかえしてみる段になると、やはり、「ルーズリーフ」が、一番便利のようである

(3)一つだけ一貫して用いる工夫は自分の感想なり批判なりを、そのつど、「カギ括弧(かっこ)」でくくって、書き綴っておくことである

4．最近は方法をやや工夫

(1)「用紙(ルーズリーフ)の色を 2 色」にし

(2)一方の色のルーズリーフには、「自分のコメントをも加えたひとつの書物についてのノート」

(3)もう一つの色のルーズリーフには、「自分自身の講義や講話の覚書」

というふうに書き分け、同一主題のものを同じところに綴じこんでおいても、すぐに見分けられるという方法をとった

P103

9 「読書法というもの」　宮沢俊義著

1．渡辺先生のお宅へ子どもたちが多ぜい英語を習いに集まったが、そのとき先生はしばしばいろいろなおもしろい話をしてくれた。子どもたちは、英語の勉強よりも、その方がおもしろいので、こたつを囲んでおとなしく先生の話を聞いた。これはあとで気がついたことだが、そのとき先生は、シャーロックホームズの探偵小説を読んでいたらしく、それを適当に日本の話に翻訳しておもしろく話してくれた。「もう一昨年も前になるが、私が軽井沢に泊まったときにねー」という調子で話してくれたので、子どもたちはだれも外国製の話とはしらなかった。渡辺先生には、私は英語と探偵小説だけでなく、あらゆることがらについて本当に親切に教えていただいた。

2．(1)中学校(東京府立 4 中)の 3 年生のころだったか、受け持ちの先生がひるめしの後にいろいろな本を持ってきて読んで聞かせてくれた。その中に本の読み方についての本があった。その本の著者は、「本を読む心得としてどんな本でもはじめの 100 ページをていねいに読め」と説いていた。

(2)おそらくどんなむずかしい本でもはじめの 100 ページをていねいに読むと、それから先が容易にわかるという趣旨だったのではないかと推測する

(3)私が本の読み方 ― 読書法 ― について自分で考えたのはこのときが始めてであった。「どんな本でもはじめの 100 ページはていねいに読め」は、読書法としては実際有用だと心ひそかに感じた。

P119 ～ 128

10 「気儘な読書法」　吉田洋一著

1．どうやって本をえらぶか

(1)何よりも、おもしろい本だけ読むべきである

○どんなにえらい大学教授が推薦した本でも、自分にとっておもしろくなかったら読まない方がいい

(2)わかりやすい本をえらぶこと

○本がおもしろいためには、まず、その本に書いてあることがわからなければならない

(3)本は、最初の一章か二章を繰り返して読んでみること

○はじめて接する著者の書いた本、ときに読者がその著者の書き方や考え方に慣れていないために、一見わかりにくい感を与える場合がないとはいえないからだ

2．文芸作品というのはおもしろければそれでいい

(1)文芸作品は「すばらしい消閑の見」であることがその本領なのである

(2)文芸作品が「いかに生くべきか」を考えるか否かによって、その作品のよしあしを論ずるような人がもしいたとしたら、そんな人のいうことは信用しない方が安全だ。

(3)もっとも、こういったからといって文芸作品に偉大なそういう思想を盛ることがその作品をおもしろくするのに役立つのなら、そのかぎりにおいてそれはまた結構なことだろう

・刺身の風味が増すというのなら、ツマもまた捨てたものではないのと同じことなのである

3．読書というものは、これを楽しむものにとっては、この地において他にたぐいのない楽しみである

P109 ～ 118

11 「病床の読書」　渡辺照宏著

1．（1）負け惜しみではないが独り暮らしがこんなにいいものだとは自分でも知らなかった

（2）病気の制約のうえに、生まれつき無精で不器用ときているから、本を読む以外他には楽しみはない

2．（1）僅かな体力、僅かな時間しか持たない慢性患者にしても 2 通りの態度が考えられる

（2）大体においてケチくさい道を歩むことにした。その方が、生命と生活を支えるのに楽だと気がついたからである

（3）ことに絶対安静のあいだはなるべく手のこんだ面倒くさいものを読むことにしている

① 1 時間に何十頁もすっとばすと、腕の運動が胸に響くので、同じ頁をあけたままでも飽きないものをえらぶ

②たとえば、新約聖書、法句経、ギーターなどをそれぞれ原語で読むと、体力を消耗せず、ゆっくり味わったり、考えたり、暗記したりするのに便利である

③あるいは、やりかけの外国語の練習問題など、この目的にかなう

3．絶対安静から少し恢復すると軽い本をえらぶ

（1）軽いというのは本の目方のことで、内容の話ではない

（2）安静中は大きな辞引が使えない。ランゲンシャイトの小辞典はあるだけ全部いつも手の届くところに置いてある

（3）起きられるようになってセットものの大きな辞書をめくると、久しぶりで家族に対面したようで嬉しさも格別である

4．「読書の方法」…「精神集中が基本的条件」

（1）読書は一般的にいうスピード感があった方が楽しいし、効果もあるらしい

－速度と理解は大体において正比例する－

（2）「一語ずつ切らずに、数語ないし、数行をまとめて捉えよ」

「逆戻りせずに読んで理解する習慣をつける」

（3）先生方が

①どんな方法で読んだか

②ノートやカードを拵えたか

③どんな道具（辞典や参考書や文献）をどう使うのか

これらを見せてもらう機会が余りにも少ない

5．「自分で面白いと思わないものには手を出さない」

12 「書物と私」　千田是也著

1．実際、新劇の世界に深入りしてから、多少つづけざまに本が読めたのは、長患いをしたり、牢屋に入れられたり、出演を禁止されたりした時くらいのものであろう

2．あの頃は、ほとんど毎日、午後は稽古、夜は芝居、本を読む時間は夜中か午前中しかない。早起きは苦手だし、芝居のはね後、仲間と気焔をあげてから、夜 12 時ころ家に帰るとたいてい朝の 6 時頃まで本に噛りついていた。それから 5 ～ 6 時間寝て、午後には稽古場に駆けつける、そんな生活を 1 年半ほど続けた。

3．（1）どうも私の経験では、本を読むのは芝居をした後が効率的なようだ

（2）今でも私は、役者をした晩や撮影所にいる時のほうが

（3）よく本が読めるし、あた、読まずにいられなくなる

4．わたしどもが本を本としてほんとうに読むのは戯曲ぐらいのものであろう

（1）こればかりはそうしないとよい芝居がつくれないからだ。活字として並んでいる台詞の奥に、その表面の意味だけでなく、それを口にする人物たちの心の動き、顔や肢体の動き、またその人物たちの織りなしていく出来事のはこびや意味、その裏にひそむ作者の恨性を読みとるすべを身に着けねば、わたしどもの仕事はやって行けないのである。

（2）それだけに戯曲だけは、私どもも根性をすえて、繰り返し読む。眼で読むだけでなく、身体全体で読む。ありったけの知識や経験を注ぎこみ、想像力の翼をいっぱいにひろげ、身振り、衡動までを動員して読む

（3）自分ひとりで読むだけでなく、俳優たちといっしょにかれらが読むのを聞きながら、彼らが演ずるのを見たり聞いたりしながら、芝居をつくる度に、60 回や 70 回は必ず読む。戯曲によっては、そんな風に読むことを 5 回も 6 回も繰り返すはめになる。そして、その度にいろいろの新しい発見をする

5．（1）「桜の園」なども私がこの芝居を始めて演じたのは 21 だったから、もう 30 年の余りを、そんなことを繰りかえしてきたわけだが、読むたびに、稽古のたびに、やはり思いがけない発見をする。今後の「桜の園」でも、初日をあけ、2 回以上も上演した後、また稽古をやってみてはじめて、なあんだと気がついたことがやはりある

（2）30 年かけてひとつの戯曲を読むというのもずいぶんまだろっこしい話だが、これは私共の感のにぶさや知恵の浅さだけではなく、

（3）やはり、身体全体で 30 年の余りも読みつぎ、読みつぎつづけても、読みつくせない本というものも、はやりあるようである

P153 ～ 162

13 「両棲類的読書法」　松田道雄著

1．（1）最初は医者になるつもりはなしにたまたま受験したのが通ってしまったという事情があって、文科的なものに異常なあこがれをもっていた

（2）教室は理乙（第 1 外国をドイツ語とする理科）教室から出たあと、私の読むものは文科の生徒と同じものであった。そうはいっても、理科は、実験だの製図だのでかなり時間をとってしまうのだった。わずかにゆるされる時間に本を読むということになるとどうしてもはやく読むことが必要になった。

（3）理科と文科との「両棲生活」は、その後 30 年間つづいて、今日に至ってもまだ抜けきれないことになってしまった

2．（1）朝から晩までつづけて本を読んだという経験は、大学を出るまではあったが、それ以降はたえててない。

（2）午後だけとか、夜だけとか、往診を間にはさんでとか、私の読書はつねに発作的である

（3）一度おちついて自分の好きなことをゆっくり、つづけて読みたいというのが高等学校以来の私の理想である

3．私の読書法

（1）①本のとじがきれるほど読んで、また新しい本を買うときの気持ちというものはなかなかいい

②本には遠慮なく「赤スジ」を引く。「赤スジ」を引いておくと、あとになって読むときにそこを拾えばおよそ必要なところはつかめて、便利

③外国語の本には、ちょっとした内容の見出しを欄外に書き込む

（2）本をたくさん読むためには、場所がらをわきまえないこと、電車の中では本を読むこと

（3）時間に対して吝嗇であること

①時間を惜しむ

② 25 才まで勝負ごとから身を守る

―碁・将棋・麻雀などのルールは、はじめから覚えないこと―

③若年でアルコールを嗜むことも本を読む習癖を守るのに適当でない

（4）読書に対する生理的条件を尊重すること

①なるべく疲れない姿勢で、夏季は軽装で読むこと

②ねころんで読めるものはなるべくねころんで読む主義

③あおむいて本に「赤スジ」を引くために、本来医者がつかったエンピツのデンマルクグラフの赤を使用する

＊すぐねころべるという点では、私は畳の愛好者である

（5）財布が許すかぎり本を買うこと

（6）何らかの義務をもうけて、いやでも本を読まねばならぬようにすること

14 「読書浪人」　松方三郎著

中学時代の英語教師、鈴木大拙先生の教え

1．（1）本というものは読まないでもいいものだ。積んでおくだけでも立派な値打ちがある

（2）本というものは部屋に重ねて置くと自然の香りがそこから立ちのぼって来るのだ

（3）そして、それを呼吸していることが大切だ

2．本を読むならどんな大きなものでも一冊、頭から尻尾まで読み通せ

3．（1）英語を勉強するのに英和辞典ではなく、英語の辞書を使わなければならない

（2）間違ってもポケット版などにたよらぬこと

（3）辞書はいつも身近において、それを開くのに億劫であってはならない

4．区切り、区切りを正しく読んでいくことが大切なので、それができれば、半分以上は、わかったようなものだ。個々の単語などは、辞書をみればわかるのだからあとはわけはない

5．声を出して本を読む、響きのある文章を好む

6．〈エドワード・グレー〉

（1）書物なく、楽しみのための読書する能力なくして、何人といえども不羈独立であることはできない

（2）しかしもし読む術を知るならば、決して孤独のうちに打負かされることはない

（3）読書に喜びを見い出すことができれば、長い汽車の一人旅に飽きることもなくなるし、ひとりぼっちの冬の夜長も限りない楽しみを与えるものとなるのだ

P183 ～ 194

15 「濫読」　円地文子著

1．「物語―小説の世界は現実の生活とは違うもので、それは現実より遥かに色彩の濃い興味本位のものだ」

2．（1）一方で私は英文学や中国の古典をよむことを勉強していました

（2）「詩を味わうのには原文の言葉でなくては駄目だ」

（3）翻訳によって、外国文学をほんとうに理解できない

3．（1）「読書百遍　意おのずから通ず」

（2）源氏物語は各巻の「梗概」をまずは十分理解

（3）源氏の一番優れているのは「若菜」以降なので、新しくよむ人はむしろ「若菜」からはじめて、あとで「桐壺」をよみ直すのがいい

P195 ～ 199

2022 年 8 月 29 日（月）